

薰箱錄

天



僧4
775
60

董藕錄卷之二十四

目錄

鬼神論

新井白石

辨道書

大宰春臺



薰蕕錄卷之百四十八

中村直道輯

白石先生鬼神論序

夫鬼神之跡恍兮惚兮言之難也尚矣易傳
曰陰陽不測之謂又曰知變化之道者其知
神之所為乎唯神也故疾而速不行而至中
庸曰鬼神之為德其威矣乎視之而弗見聽
之而聞體物而不可遺使天下之人齊明盛
服以承祭祀洋洋乎如在其上如在其左右
嗚嗟先聖之教至矣乎

我邦寶正之際白

石源公學該洽博識透洞深著作之富動及
瑣碎其所釋鬼神論一篇能近取譬而言所
難言者也其辭則諺片說則典始則根據經
義中則旁引詠異終必歸納雅正實足發蒙
矯機矣唯是一時應需小而辨物作者自不
不爲意松淑之徒轉傳騰寫國字糾紛訛誤
相錯殆至不可讀頃日鬻書家某爲鑑此篇
校者某今刻已成吾所知秋商者來劇求叙
焉余謂校者所照亦皆轉傳之物無定本之
取正則恐有未悉考究者乞勿余不與焉要

之虎園小冊身擬類固不足掄源公之瑜此
刻足以極和淑之徒騰寫乃爲叙以并其首
么

寬政庚申秋九月望

天山真逸撰

いししは存管の送せる言世より儒生の格一よ言を
ありせんとしつありてこの名とては辨せんす
それとてしきやとてしき其の字も同海人の格に
ありぬ一とありてしつとてしきとてしき
よらそこの貴とやりし

と神といひ地といひ祇といひ人といひ
鬼といひ一同禮をいふとてその名異れ祇と
陰陽の二つの氣靈の通一といひこれを鬼神といふ
たり陰陽二つの氣をいふとてしきとてしき
と伸といふと伸といふと伸といふと伸といふ
一元の氣の所その氣凝りて伸とて陽といひ
伸といふと伸といふと伸といふと伸といふ
伸といふと伸といふと伸といふと伸といふ
陽の事といふ伸といふこれ物中の物といふ
陽の事といふ伸といふこれ物中の物といふ

向しは伸あり陰の事といふ伸といふこれ物中の物といふかく伸
は木のたのつとてしきとてしき二木の良終とてしき
潘橋渠たし陰陽と鬼神といふとてしき
よの向しとてしきと鬼神といふとてしき
陰の靈神を陽の靈とてしきとてしき
向しといふは向しとてしきとてしき
と伸といふと伸といふと伸といふと伸といふ
日月星辰の類これなりありて靈記のなるあり
易に不可測とてしきとてしきとてしき
とてしきとてしきとてしきとてしき
とてしきとてしきとてしきとてしき
とてしきとてしきとてしきとてしき
とてしきとてしきとてしきとてしき

神にあらはれしむるにけりてはたすれぬ事す上
少のたふれとありて鬼は人なりこれ花魁地よりの鬼は
神なりといふ所候なり
其骨肉のこころは少くあまき野乃おと朽をぬこころは
朽を相骨肉
のこころはの異形の鬼のこころは
地より神にこころはなりうの泉は鬼は
天より
神にあらはれしむるにけりてはたすれぬ事す上
少のたふれとありて鬼は人なりこれ花魁地よりの鬼は
神なりといふ所候なり
其骨肉のこころは少くあまき野乃おと朽をぬこころは
朽を相骨肉
のこころはの異形の鬼のこころは
地より神にこころはなりうの泉は鬼は
天より
神にあらはれしむるにけりてはたすれぬ事す上
少のたふれとありて鬼は人なりこれ花魁地よりの鬼は
神なりといふ所候なり
其骨肉のこころは少くあまき野乃おと朽をぬこころは
朽を相骨肉
のこころはの異形の鬼のこころは
地より神にこころはなりうの泉は鬼は
天より

ありて子の空ひしむるにけりてはたすれぬ事す上
少のたふれとありて鬼は人なりこれ花魁地よりの鬼は
神なりといふ所候なり
其骨肉のこころは少くあまき野乃おと朽をぬこころは
朽を相骨肉
のこころはの異形の鬼のこころは
地より神にこころはなりうの泉は鬼は
天より
神にあらはれしむるにけりてはたすれぬ事す上
少のたふれとありて鬼は人なりこれ花魁地よりの鬼は
神なりといふ所候なり
其骨肉のこころは少くあまき野乃おと朽をぬこころは
朽を相骨肉
のこころはの異形の鬼のこころは
地より神にこころはなりうの泉は鬼は
天より

傳の後ろりめは鳥骨をりと相せざる事とて不道くして
中りくゝ家とは孫の親となりて鳥骨の親すと不道ぬ
とるぬる人の祖考の精神既よはよむる也とせんと思ふ
鳥骨を肉のたの親よりはれぬるも子孫の精神折角
く祖考の精神ぬれ子孫その誠敬をばくして家よりつぎ
の精神あつたれば祖考の精神あり格を理りふはつらじ
漢の武帝の御時未央殿の稽ゆぬれくしてみづく鳴りて
子の養ふともやむしなりみゆとて同じせむひと東方朔
奏一節てそれ銅八山の子とて山を祖の母とけはる陰陽
の親教との同じくやむいお母とたお感す魚一山をさう
くし崩るゝおりのめん易ふ時精神ふわりそ子とふ祖を
いふも祖の親とてゆるむりのうらぬれははの親ありぬと

トケのりつらりの内は南嶺の山を山と事字解里とを
奏一けるこの山は海霧のせよはし二なるうつれ蜀の嶺山とて一は
とも人あふを山とていふはこゝろなりとて作ら
らまの理とて一也一か共一氣の感するを百世傳るも
をうらる事とありぬとせんハ礼一神を非禮とけす也
非禮と礼らすといふは我族非礼とありぬとせんハ神を人
と他といふ事とて共食と高る事ありぬとせんハ陰徳
とて火とせんハ陽徳とていふは徳とせんハ水
たるといふは徳とせんハ徳とせんハ徳とせんハ徳とせんハ
とてお感するも方理ありて備りてせんハ又後ありぬ
孝よありぬるの人のありぬる事とては徳りふゆる又子の
春秋とありぬるもいふ苦人滅鄭とゆるを由とて苦
人難の國とありぬるもいふ苦人の公子を苦の子とて
苦とて苦

とひたるがたせむ所のくろくをいふ事にしてその意をかゝるの申の
連ふれんゆはらばす一説をては入るの社と志のつらむて
らるの後釣する箱の書と異て是よりおとふ娘より記し
よあつすあふようのいざう信れあむとつしまへやまを
よあとあはれおあむいよあを物とあふいふこれその下部
如のまのまうれとをきくころの切きふよりてかく遠くよ
相感一はる物なり宋のときの手記
程朱教の記すいなる人乃たま
國の中よりむらむら書のごうあふんとて人書の籍とて
聖の中よりせ一筆のありとてあふまはれあふまはれ
ゆら他のくあて書よとあられ記すあふゆと信り借與し
ころ男よ此事と告げる故軍ふゆまる書あはれゆと記さひ
はあて只獨まをふきらゆ記ふたがそのの中より人の

多すりをあや一國ふまはれ一きつら夫のあを自らす
てふ記一ゆりぬりはるいあら一籍あふの教くせし
記せ一筆ゆとてあひ記さふんこの壁の中とてあふ
る一それなはる一あひひあふた一ましひなるうは
外記ゆとてあひ一教のまそこの聖の中とてあふ
叙いあふる書はた作く信りけひ記するあむたの本や
いともみてけるといふ記もまて夫の病舎とてあふあはれ
あを記する人の意のゆりあふりありとてあふ記すあふ
ひとてあを記するのこまきいざうを竟は人ばらさむおてか
うはあつまひあふあふとてあひ記さふゆり程子朱子の書
あ宋の書あむ
り記しとてあふらひとてあふ人記とてあふ人あふとてあふ物
より本とてあふ人あふとてあふ物とてあふとてあふ物とてあふ

婦政の約つるなりとてつら又春秋潛澤巴小の男の女と
化すりて借人位とる女の男と化すりて借人王とるなりと傳
まにいれりよりこの事ありしとをえりつら討王の行とき
周の文王の四十二年と武王位に即せききひり元年たること
女子もて化してたまふれつら竹書紀年もええり戦國の
世魏の襄王十三年よこの事有りし史記世家も載せぬ
と存漢晉唐宋の世も此事ゆりき漢のとき一人晉は二人唐は一人宋は二人
つら蜀王武都のたまの如くをねるとをいひて國は
ほらゆりしつら華陽國志もそのら漢晉の
とき宋の南後の後明の階も年中よその事ゆりき漢は二人晋は一人宋は二人
男子女子とをえりつら宋明の世もその事
ゆりき宋は二人姑蘇のときこ子とつら事ゆりしこれ明の

この唐乃司周文表わくくある文表持し者よりいふ
ゆり軍機しつら事ありあき今の入男ありつら
女色よりなれき一勢ひつらありつら有つら物とを
いひつらこれらに活裏世のものと七國の形をれ京房が占
のとき或いあやまつらつら天人の意もいふ遠くは
陰陽の表陽しふつら入つらすやいお淫のめれ化
す婦人と成玉暴の者化して猛虎となる心の変する
とて病変せぬといふと得すといふ釋氏の記それ暴怒
の心あるものいふこといふに記せらるの辨し余欲のこら
るものも人ありしこと記せらるの根に記せらるぬのも
ぬに終る形の心いふ事いふ氣とも雲すく氣ひと交
るすこと死とも變する彼たふ怒るけき大ありす

夏とあつせぬとさういひその雅のいふふ度と詩書撰禮
中れよのさきよとあつ利と命に任むとさうの雅いさる
可い性か乱神とさういさるその雅いさるその雅いさる
匹婦とあつとさういさるその雅いさるその雅いさる
ひりらとあつとさういさるその雅いさるその雅いさる
さういさるその雅いさるその雅いさるその雅いさる
夕ふ度とすれらうこれ道天下とすれらう
ひり神鳥の御時九列の金成九ねと
乃鼎以饗とさういさる山川奇怪百物と園一はひ人と
神書とさういさるその雅いさるその雅いさる
夫中いさる李氏と并成とさういさるその雅いさる
拙也とさういさるその雅いさるその雅いさる

周象とあつ性を續羊とさういさる高年并とさうい
名とあつとさうい本と齋の性よさういさる類のいさる
礼聖人の類いさるいさるいさるいさるいさるいさる
高年といさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
のりといさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
なまひといさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
えありといさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
その説のいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
類いさるいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
水とあつ性いさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
度と日月の性いさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
百の性いさるいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
此の性いさるいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
神鳥といさるいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる

その害ありき一に水の計はくも花をく一人ありて
おれら乃新音一りし向の事いおれらとほくる
とありすつらつら所をく晋の温嶺が牛満
舟板やとてこの度水もくく水族のあつまる
うくはく一岸と燃してすく一處くのりや一
族水くうのんてあけそぬその東の夢よ人ありて
道ありをくぞおれ相おれんとはくしひらみ
てたり海生大海おきろる入あ所をく人ゆきこれ
まぬおれはくも紫の伝なうらむ張南行のつひ
んくつらよあもくをばくゆきこれらの外まい人
家討あ
くそ中しゆま事ありて鬼怪ありはく人鬼の怖
まりこれ物物たり物物しり一妻子の陳蔡のつら

くくせしひくく入く方の長九人けりの男
流兒衣くうく冠きたるはく入ありて叱りよの声を
ひくく物く侍仕の人と初る子首すみておハ
おれとのぞくふあくと宙くつなげて御ははく子孫
はくくをくはくく勝んくあふたり
らく夫子くくはくくく彼の男ははくわらの
おれあたりはくひくくあああなりくくはくそのから
くひくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
くく成親業の九人けりの事ありてあつらひくく
おれはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
うれはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

山姥ハルマの嶺南の山姥ハルマ似く河保雜事山姥ハルマといふハ

日南南丹茅地日南南丹茅地の巫女巫女野島野島似り即ち博多野島

河太郎河太郎といふもの宋の徐積盧川の河のほとり宋の徐積

小見小見に雜記白澤白澤園園といふもの封のおろく海小島

いもの南海の海人海人から僧のとくにてすこゆ小き

なりといふ似り彈は猫ましこいわを金華の人は影ま

何も猫之身持たははとく人とまらしましといふ乃孫まし雜祖

女神の子もたり尸子の地狼其目折志の買二書よのた地中

白次島まいもあり本の桂と彭候といふから思き猫の似

なまらふの物はは見えましこなとらいくありて妖術と

たらふ事日南東方の盡毒の本トいひらり毒盡取つてこ

人のあらふ事そのおおいその名もいはしこの事といひらり下らりもありし

笑しこらいし九十すまいしるあらりすこの事といひらり下らりもありし

山や園然一庶民の毒盡と沸くこんははらりならり一見

えらり今とせり外はと傳へる人乃妖術と役使すな

とも傳傳たり妖術として巫盡乃頼たり一世のおらり

小らりさとあらい妖術との下ありて神がまいしした

まの志津と沙のさら塔陀とまり一はかいいぬあらい

ゆいまらりといひ一根といつきまりし社の名もいひらりい

根を射らせしものあまらの神目といはれたやらいらう

つたへしに沙ははらり一大明寺經儀の御白蛇の

象腹を祿尊を庶民の毒盡をからいはらりいひてたといはれし

といひらり一事トをありしはらり一白蛇乃剛よらり

て象乃すまらり一象一つらのみあらひし祿尊といふの

のをあらりしと天帝といふ一つを一に象いひし

この靈魂 天賦の神に授けらるるも亦も祀りしを由り法
氏よりほしこし一祀として奉るとは先を先を以て因を定め
よくその當とゆせよよくその意とゆせよ一木の心を
其郷國としていゆふよ何れも亦の正祀とすすなりは
らに今佛ははるも又法にいつゆよなる佛を西域の
化人をかりつるを以ていなるつらうも地を以てはる
天然大神乃神す此の豊葦原の中は國志なり一りきん
ちりちりこの世に世にふいつきまつらうも地を以て
こらく九祀也いゆる 祀名は他のくふの神まつるへり
りゆらけりや今も伊勢を以て信託としてし奉るをゆる
せんす一人より大宇祭とほりて國を以て先聖先師とま
つらぬの例は家々の其法と奉す。信託の佛ははるま

らんといふ一かじの神の人の信ふるをいふら
まねりやこれいふに祀のつらふよなるものや其
意なり一りゆりて祭るとゆつらあるに義とてせむら
ゆらもいふにこれ一してみいゆまといふにね一なるが
行ひの善いぬに何れからとせしむるをいふに
この花やぬもいふにあり佛ははるもいふにね
ひらりぬねに氏の義とほしむるにまらぬなるそのあ
ま代と悟りてしすや一り改るにいつらぬにかなくし
まをうとせむらむはるなりかして又佛の悲願よりして六
趣の教誨としてぬる 六趣は 九品の快樂とまらんと
あつらぬに家がほるにちのり祖考の神とて祀はけ

とのいよひ一本何のあやまひなく佛の教のあはれあり
るは法あり父母ともあはれ書かすを求むる道に
あふまゆその事これあはれあはれとて利せんはする
かりあはれあはれと善とをすて強よあひあはれとて
御とうくらことよふあはれあはれあはれあはれあはれ
若と強せしむるあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
よありあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
羅十五字は精とてつ本とてあはれあはれあはれあはれ
このあはれ世に法にあらん史傳とてあはれあはれあはれ
もつともあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
其依りて鬼に信す性忠なるあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

子孫ともあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
力のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
けりあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
わのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
たりそのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
別衆を度せんあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
めん本はあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
と程氏のいひん正しくあはれあはれあはれあはれあはれ
庸るが病とほすあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
医せんなりふあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
毎物こころ本とてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

まに後すのちらうぬしといふしつこの方と母の半
きやあつらふ其後とわらうしつこのはつれはあつら
茶のきんじつあり切あるよあつらぬのちつれその
病をふるふるこつら其術抑さむあ病をいふとこ
よ後一ぬこのつらこの毒をいふと後せんといふ
その毒を治するよあつらつれをいふ法一やまひ
あつら治のばつらつらつらつらつらつらつらつら
くつらの毒をいふ法一つらつらつらつらつらつら
無つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
無つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
少て君臣とていふあつらつらつらつらつらつら
きつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

無つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
の人よあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
ものちつらつらつらつらつらつらつらつらつら
あつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
記指とつらつらつらつらつらつらつらつらつら
らつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
後つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
命とつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
人多くつらつらつらつらつらつらつらつらつら
らつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

外より見すに幾許書概論のことと云ふに難く宜しと云
海ありてこの怪力乱神のこと記を誤りあはらるるを
おりんらと

千時と保二年と云ふは冬有方るに於て
おむ亦亦喘を申すは目あ田孫助海

おまより二冊なり
お子の後文かきうはうるるある
あういふまゝお子に於て海ありあはらるるに
うふまゝの理え来ある例
まゝ後きういふ

中村直道

薰菴録卷之百四十八

薰菴録卷之百四十九

中村直道輯

辯道書

太宰純

儒佛神道の同異を論じ而して辯論其大なる所
を本繁多くとて逐一に記し憶りてかく再して又
む又此類感記りては難義はる純平日論辯の趣を
尋く紙よふと記しかく以て同く然らば中の記を
先きと帯に作らば聖徳太子の言に儒佛神の
二道の如くは物と云ふは其の如くは其の如く
と云ふは一いつに然れぬ半の論也といふ子に
久し佛及儒をかく思ひかくて儒をかく對せし
はあり

りてその神代文一ツの道なる事ハ後世に彰りて太
子の何小舞のりひくはけふ不邪乃と云く儒佛は二
道なるべくは古具のこまのあくるもなまを計ぬ
物にけりし作じりていふまゝをたふしはゆ係保く
とてどう知りて流し沙をに得りしをくはた下河の答りか
とていふは流しとは不あはくはあはれはけりしやうと
先不邪乃を以て考ふし神代天をより二十代欽明天
皇の流しとていふ朝小道といふの事もさういふ事なる
くはくはあはれは二十代用明天を以て知るに既たしと
明皇入せれるゆひ書以流しを同しあひして二十代
推古天皇は阿倍孫の位小唐さし宿禰と定め衣振と制し
禮樂の無しとて國以治め民と守りて之明の化以天下に

既たすひひ 本朝小経と既たの次ハ制作の事ともいふ
さへあはれこれに聖徳太子と極さるれりとも名不河
とていふ事なる事阿倍孫小経とて偏に和くは釋氏の
乃とて流し知く好まればとも中身天皇聖人の道とハ未
ゆりの流しはともいふとて述作の書とて多くは傳りては
流しとて是非流しとていふ今もその事流しとていふ
ゆ事なる事阿倍孫の流しとて極してはけりともいふ道法
舊事本紀のりひくは太子は其述とて極するも入るも
其書とていふとて世の入りゆ事なりし流し明白なり
とていふ事なる事阿倍孫の流しとて極してはけりともいふ
物とていふ事なる事阿倍孫の流しとて極してはけりともいふ
鼎足とていふ事なる事阿倍孫の流しとて極してはけりともいふ

たれくは君子之畏の第一と皇天命之孔聖の終極
ゆもて命は天の神なりと人智以て測られぬは
君子を以て畏るはよく周易の繫辭に陰陽不測
之謂神といひ祝部は神也者妙為物而為言者
也といふ皆鬼神の妙ありと測られぬは以て
汝神を天の命鬼神のありといふ何れ理行のあり
しは以て人を知りてのみ只果して知らずなり
たれくは民を教ふは公をたかして民以て欺るは
あはれ鬼神といひは公をたかして民以て欺るは
初る初るありといふよく測られぬは以て公の
御まは神なりと皇人之道の中は公の御まは聖人の
たりといふ別小神道として一つはありといふ

世小神なりといふは法は儒教のたて加入とて建ま
りていふ建まるといふは佛法の法よりて法を奉
むる家より先代卜教兼傳りて世小法なりといふ
信を神職の家よりいふは法よりて法を奉むる
思ひ 不測の巫祝のたれくはとて七十八の
法は二三分は儒道は祝部として一はの道を
いふは中興法會といふは物ありといふ智徳太子
の時人決て
事にあはれは今の神なりといふは新加
法は傳授ありといふは言宗の河原梨護摩師の
業と教りては巫祝の道なりといふは新加
巫祝といふは鬼神は俗事といふは國家

了女けきハ暇方とのふしやあらま士春之商は業紙をまれば
衣食紙のづき振る能なるも食紙柔くも食紙はすま
らふ今のむす入のゆく食と人ハ細く食紙はかぐあは
偽の家ねく食物とも偽くぬ投り故小苦痛病を折と持
かぐはふまへてま色の人あより折紙紙持あると折に
入まへ又飽食の意ありて折しき食物と施すもまへ
折中の食物其日の命とつたがわどさればまへよりゆりく
ま食紙食あまゆり又そのゆくおん衣服も偽りてまへより
まへ天竺の人の清淨紙好く不淨と思ひがぬく凡病人
死人食物の毒をり物又ハ火小銃け水に沸きまへ外何れも
汚りまへ有るも衣服紙とは持おく糞裏に赤る智より
偽りるまへまへ人忠素糞小赤くも衣服布帛と拾ひまへ

ゆりて泉角水を洗ひ清めて綿繡綾羅布帛の類は
く種々の物紙綴り集く糞裏に赤るも食紙糞紙衣
まへ紙衣ともまへ人の赤る物小くまへ衣物あるまへ
偽り衣服はまへ紙衣とまへ人の清淨と定ま糞穢小赤
く物紙拾ひまへ糞裏に赤る物りまへまへ餘の衣服ハ
勿論まへ偽はまへまへまへまへ或は樹の法橋紙下を
まへ風を紙紙けまへまへまへまへまへまへまへまへ
高まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ
おまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ
肝家まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ
欺瞞まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ
まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

ちりちり紙をなほべとちりちりシニシヤクと親想すのふくい糸ヒラバ放り九
相の待はと評したるふとい親念に男女好きの情と除え
るにほりゆめとい月輪観といふを曾シキは前シキに光明圓滿の
月輪と親て見る辨と親すふといは心中の念は根
掃除ちり明月おかくほりて又あといはれば初シキ月輪と曾
のあらきや親しは後シキが胸中に入るといふをわらり
月輪小成りく親しは古人月輪觀の功獲りて後シキは時中
に親シキちりちりちり親しは水想親シキ
いふを我が一勇清くおに成りく親シキぢりふといは是シキ人の所か
地水火風の四大假シキと和合しと出する物あり終シキは消滅
ちて去るにゆりといふ親と親シキぢりふといは此シキ或は淨シキち在
處と親シキしと佛菩薩の相妙シキ以親シキすふはありかやう小

親と親シキはわらはは活シキん紙静めく毒を親シキたてて明シキは
悩と掃除しと苦親とわんおふといは菩提をいふを梵天
めく漢語は梵シキと翻譯シキしといは梵を梵シキとわんおふといは
さうりや刑シキしといは梵シキは一切世間法シキの活シキ人乃迷シキんを
思シキちる物シキとわんおふといは梵シキを存シキすといは
六塵シキは六根シキを汚シキしとわんおふといは情欲シキは引親シキは物シキなりと親シキ其
色香にわんおふといは紙シキはわんおふといは煩悩シキとわんおふといは
貪欲シキも情志シキとわんおふといは教生シキ偷盜シキは思シキともわんおふといは
邪シキといひといは自他シキの害シキはわんおふといは修シキは修シキの力シキといは
六塵シキはわんおふといは汚シキしとわんおふといは思シキひといはをわんおふといは一切
世間は事シキ小シキにわんおふといは貪シキ者シキの念シキをわんおふといは心シキ終シキつといは心シキ境
法シキありわんおふといは心シキをわんおふといは中シキに淨シキありとわんおふといは

くいんを一つさすてハき物にくいんを一人に裁けり
決あしくけりぬ事ゆくいんゆすの事なすら礼をよてい
おめんとさるがすぬりり物く小てい心を小児の如くさる者をも
小児ふは何ふとも者き玩物に物せ盡へてさるは
可成神しい玩物なけさハ智財とさるに群るしてありて
つらひい小児に物一さるて一さる物ありてありしめん
さるれを必怒り帰く辱まざるうまは又法とさる人の如く
法は病状なりといふとさるて金慮の起る心の級小てい
法ゆき事念事怒り者つけてもと制しい制して制せられ
ぬ物と強くと制せられ法ゆき人の癖法とて病ふさるるとい
是は心疾とゆいさ法と世の中ハ心法と研んて日欲を更
して終ふれとて人小なる若くさるは心疾法とて
スクリモ

の福小くい小児に改て病ふ小なりと曰事小なる人
を被養と宗とてい法とて法ゆき書經とて
義制事以禮制心とてい般の成湯法とてい文
て管人の道の肝心とてい義制事とてい下個
家の大事より利吾人の自化の小事に智とて九事法に
さるは一に忠恕智仁ほされ必さる小過不及ありて
言う次先王は主とてい法とて法とてい事法料
管すさるは及不わく志とてい法とてい成湯の法を以
義制事とてい制い裁制とてい細人の物なすり形
よさるは及不さるは制とてい禮制とてい人忠心は
終るの信欵ありとて制一がされ物小くい情欵法とてい
それと法の忠あり終より報りとて繫とてい牛とてい法とてい

如き河ありの澄ありわくしそりいひ放逸去想し中い
先王の禮々人の情款と防んおん作りたすふふ
河の坊小警りれんれい情款の部り附れ法法固くちて
主款を恣小きり以禮制を中い情款の部を只
ふそ止んしそて止んし先王の禮法に
人小りすしそひて情款を小制しれ事
政道よりととと佛道いん法法りいん法法り
海部小中し柳七妄妄い記人し罪しそ是と戒
一向小忠念妄を部ぬ柳法をいそ甚難と事とい
聖人の及小は中し忠念を部りとも能法法法とそ
忠念とそだそ部小不吾法いんれそ君子や中
に忠念部部り罪とそそ部無妄小周く礼法法

礼と力小不吾法と次者と小人と戸いた人そ妻女とそ
まも法小不吾すのは人情小といは情小法と法法礼と
高り礼の婦女に誠ぶそ小人といは法と守り情を
柳と部が妻女いんそ礼の婦女に誠法といは部
君ありそいそ罪のまもを部りそ誠とそ部の上とそ
情の部りまも法に部りい法とそ部初りそ法法部も
戒とそ部りい部とそ部は甚易とそ部とそ部り
禮法守り情款法制と部小部と部りそ部り
そ夫と部りい部とそ部りそ部りそ部り
て視聽言動ありそ部りそ部りそ部り
部りそ部りそ部りそ部りそ部り
部りそ部りそ部りそ部りそ部り

やまぐさり海はあぶらもあらば自然の清き水なり
かのごとくあまの心は積りて早ゆきとせりいづれも
もまり清く心もたつきて丈夫の魂定りいかにの如く
礼教よく練固める人成徳の君子なり徳より六
心法を研し仰る物なりは乃に礼教といひくは終
義は鞏固するたる物成徳の中は礼教とて身なりハ
んは法を治りてあはれ治まりい貴舜より礼教も
る節くを治る君子治りての如くあつらひの如く
心性の統へあふり治りてこそ善法せし徳も宗の世に及
程子朱子專ら其法よく宗るこそ人成徳の君子なり
性法を治りて自然の徳もその宗儒の心性を統へる
師者のま福もその法の宗人なり成徳の如くは徳も

經書小の禮記の樂記の中より致樂以治心といふ文を
よりかた治心の文字をんがら樂記の意を聖人は道小を
治るは是れ其心も心は治りて智也といふ也其物なり
何れも其心は治りて其心も其心も其心も其心も其心も
りめくは玩物に治りて其心も其心も其心も其心も其心も
を治りて其心も其心も其心も其心も其心も其心も
たりて人成徳の如く其心も其心も其心も其心も其心も
と自ぬるも其心も其心も其心も其心も其心も其心も
樂小雅俗樂の意なり其心も其心も其心も其心も其心も
俗樂を人成徳の如く其心も其心も其心も其心も其心も
より俗樂は世俗の法に治りて其心も其心も其心も其心も
也其心も其心も其心も其心も其心も其心も其心も

孔子の原あるは孔子の道は孔子の作りたるは二帝
三王の道也二帝三王は自然の道也其の人間
忠道ありては必ずしも必ずしも用ひては
てはては天下の道人の及ばずは必ずしも
是れ大なるありては必ずしも人の性も
一人も其の見る見識の者も必ずしも
堯舜の世にも有りては必ずしも通色大
大なるありては必ずしも同じくは必ず
とも先王の世には左道と名づけは必ず
は必ずしも小齊異なり道と名づけは必ず
執左道以乱政殺を以ては必ずしも
るるに必ずしも流と名づけは必ずしも

大道蓋に約ありては必ずしも
ありては必ずしも止むるは必ずしも
めては必ずしも世に必ずしも先王の
楊朱も必ずしもありては必ずしも
墨翟老聃莊周申不害商鞅韓非は必ずしも
ありては必ずしも世に必ずしも後世
禪人はい必ずしもありては必ずしも
ありては必ずしも漢の代に必ずしも
より孔子の道と名づけは必ずしも
と必ずしもありては必ずしも
は必ずしもありては必ずしも漢の
并に必ずしも南北朝と名づけは必ずしも

古者と云ふは西伯といひて後日人進んですべし先此書と云ふ
書一して少流の事以不審といひて再問以約す凡此書と
不之と云ふく先王の法云に依りて孔子の教を述ぶ胡礼
多し流小何くは一と記すある事大少くは教慮は止む
事細くして此勅辨あるを云ふは不之と云ふ

辯道書 畢

書辯道書後

古先聖王統御宇内也以天下為一家以中國為
一人當是之時車同軌書同文故異行者有誅異
言者有禁道豈有辯邪百家往而不反人執其所
見家夸其所長譬之耳目鼻口不能相通道豈無
辯邪蓋不得已也春臺先生有嘗與人辯道書書
賈須延年適見以為奇貨可居遂請上木云嗚乎
道之裂也猶七國自王也此書其終成秦政一統
之勳歟方今

昭代同文之治輿隸亦能解國字則此書之行其

必速於置郵而傳命哉享保乙卯復月下浣
大泉莊內水野元朗書于東都神門邸

天保五庚午歲自十二月十一日起筆同十三
日於八代郡高田庄上松玖磨山中書寫之
中村萬喜直衛

薰菫錄卷之百四十九終

薰菫錄卷之三十五
大尾

